

歴史の中の留学生 ③

昭和初期の天理教

エラケツが来日していた昭和4年から11年の頃の天理教はどのような様子だったのだろうか。その少し前からの動きを調べてみると、第1次世界大戦中の大正5年に教祖30年祭が執行され、大正10年には松村吉太郎本部員が提唱した倍化運動が行われた時期である。当時は、信徒も布教師も教会もすべて倍の数にしようと、教祖40年祭に向けて教内が奮起していた。エラケツが通っていた天理教校別科も、大正10年の前期は495名であった生徒が次の期には1,000余名、大正12年には4,400名と増加していた(松村吉太郎『道の八十年』養徳社、1974年(4版)、325～326頁)。大正15年1月には教祖40年祭が執行され、また管長に就任した中山正善2代真柱が東京帝国大学に入学し、一層布教の熱が高まっていた。

国内だけでなく、海外布教に力を入れるため、大正14年には天理外国語学校(天理大学の前身)が設立され、また昭和2年には天理教教庁に海外伝道部が新設されたりした。

このように教内では海外布教の機運が高まっていた頃で、昭和8年という、佐藤軍記の中国伝道が行われ、昭和9年以降は満州天理村への入植も行われた頃である。その結果、海外から教校別科に入学する者もあり、天理教内には教を海外に広めようと布教熱がますます高まっていった時期と言える。エラケツの来日も現在の海外布教につながる先駆けであった。

宮武正道、北村信昭について

エラケツの来日後の交友関係はかなり広いが、その中でもとくに深い関係を持っていたのが宮武正道と北村信昭である。

宮武は奈良の製墨業宮武春松園の9代目として生まれたが、家業には就かず、語学に興味を持ち、若い頃から語学の勉強に打ち込んでいた。わずか32歳の若さで亡くなったが、その短い生涯を語学に捧げた人物である。旧制奈良中学時代からパラオ語、マライ語、ジャワ語など南洋の言語の研究をし、旧制中学卒業後は天理外国語学校馬來語部(天理大学外国語学部インドネシア学科の前身)で学んだ。そして短い生涯の間に『標準マレー語大辞典』をはじめ、南洋に関する著書を数多く著した。また世界共通語としてのエスペラント語研究も中学時代から始め、天理外国語学校在学時には北村らと奈良エスペラント会を発足させている。この奈良エスペラント会が後にエラケツとの出会いに繋がっていくのである(宮武タツエ編『宮武正道 追想』私家版、1993年)。

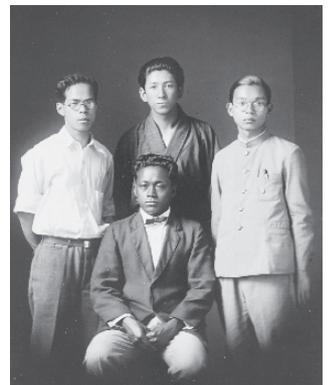
一方、北村信昭は奈良・猿沢池畔の北村写真館に生まれ、奈良師範学校附属小学校卒業後、県立郡山中学校に入学、その後中退し家業の写真業に従事する。学生時代から文芸同人誌『同化』の同人になるなど、文学青年であった。志賀直哉や武者小路実篤などの文学者とも交流していたようで、宮武正道主催の奈良エスペラント会にも参画する文化人であった。エラケツとの出会いにより、『南洋パラオ諸島の民族』や『エラケツ君の思い出』のほか、宮武との共著『お月さまに昇った話』などの著書、また民族資料・民具類などのコレクションも残している。『宮武正道 追想』の中で、北村は宮武との出会いについて次のように書いている。「数日後、宮武君を訪れて入会したが、会

を主宰する彼は天理外語馬來語部1年で、私より6、7歳年下、白皙小軀ながら、眼光炯々、意気盛んな青年で、なかなかの毒舌家でもあった。彼は当時の旧制・奈良中学(現・奈良高)に在学中、1年位で大体エスペラントをマスターしたという才人である。」奈良の好奇の文化人北村と語学の天才宮武はこうして出会ったのである。

エラケツとの出会い

ではこの3人は最初にどこで出会ったのだろうか。エラケツは昭和4年9月に来日し、天理小学校の宿直室に住み、その後、郡山大教会詰所にも住んでいた。宮武とエラケツの出会いは昭和5年10月25日、宮武が天理外国語学校の外国語劇に出る時、楽屋で会ったのが最初のような(黒岩康博「宮武正道の語学道楽」、『史林』94(1)、2011年、136頁)。宮武は自らが主宰する奈良エスペラント会にエラケツを誘い、北村は宮武宅2階の書斎でエラケツと初めて会った。北村は当時、3日にあらず丹波市(現在の天理市)の彼のもとに通っていた(北村信昭『奈良いまは昔』奈良新聞社、1983年、68頁)。昭和4、5年頃は、現在の近鉄とJRの天理総合駅より少し南側に国鉄の丹波市駅があった。もちろん蒸気機関車の時代である。また天理本通りも、本部神殿に続く道の両側に商店がただ並んだだけの道である。田園風景が続く中を、蒸気機関車に揺られて重い風呂敷包みを抱え、約10kmの奈良一天理間を北村は何度も何度も往復したのであろう。宮武は天理外国語学校の学生であったから、毎日天理に通っていたと思われる。

ちなみに昭和5年の頃、エラケツは20歳、北村24歳、宮武18歳だと思われる。写真を眺めると、この青年たちが奈良や天理で、南洋の話やエスペラント語の話などをしながら楽しく過ごしていたのだろうと想像をかきたてられる。



右から宮武、北村、吉田、前がエラケツ(奈良大学図書館所蔵)

最初のお別れ

エラケツは昭和7年頃、あまり体調が思わしくなかった。奈良は盆地で湿度が高く夏場はとて蒸し暑い、南洋群島から来たエラケツもさすがに高温多湿の夏には弱かった。それで、日本滞在中に世話取りをしていた山澤為次宅に移り、療養しながらも天理教校別科を無事に卒業し、昭和8年6月に帰国した。もう日本には戻らないとのことで、交流のあった人たちとは、帰国前には何度も送別会などを開いていた。1回目の来日時、北村はエラケツとの交流を深め、『南洋パラオ諸島の民族』(東洋民族博物館)をまとめ、宮武も『ミクロネシア群島パラオの土俗と島語テキスト』をエラケツと共著でまとめている。宮武もまた、昭和7年頃は病気がちだったようで、天理外語を中退している。エラケツもそのことをずっと気にかけていたようだ。この時には、エラケツはもちろんのこと友人たちも、もうこれで会えないのではないかと、さぞや寂しかったことだろう。